

# 第 一 部

## 研 究 基 調

# 目 次

## I かかわり合いの豊かな子供を育てる教育課程の編成

1 研究主題設定の理由	1
2 研究の内容と方法	2
3 教育課程編成に向けて	
(1) 学習指導要領の改訂を受けて	4
(2) 子供の実態	7
(3) 本校の教育目標	9
4 かかわり合いの豊かな子供を育てるために	
(1) かかわり合いに関する子供の実態	11
(2) かかわり合いの豊かな子供とは	13
(3) かかわり合いを豊かにするために	15
5 教育課程編成の実際	
(1) 教育課程編成の留意点	21
(2) 指導内容の選択・組織	21
6 本校の教育課程の構造	
(1) 本校の教育課程の全体構造	28
(2) 学部（学年）別教科等配当時数	30
(3) 学校行事及び学部関係の行事	30
(4) 児童生徒生活時程	30
(5) 週 時 間 割	31

## II かかわり合いの豊かな子供を育てる生活単元学習

1 は じ め に	32
2 生活単元学習の指導計画作成の立場	
(1) 生活単元学習の基本的な考え	32
(2) 目 標	34
(3) 指導計画作成上の配慮事項	34
3 各学部での研究	35

参考・引用文献	36
---------	----

# I かかわり合いの豊かな子供を育てる教育課程の編成

## 1 研究主題設定の理由

わたしたちは、昭和55年度の開校の年から昭和60年まで「生き生きと動く子供を育てる教育課程の編成」をテーマに取り組んできた。その際、教育課程編成の柱として、「動き」を位置付け、それを指導計画の内容に含めることで、子供と環境とのかかわりを向上させ、生き生きと動く子供を育て教育目標の具現化を目指してきたのである。そして、この研究により、子供たちの環境へのはたらきの増大、活動意欲の向上等の成果を得ることができた。しかしながら、その成果が研究領域外の活動へ般化されにくいこと、また、子供の発達や状態像をとらえる際のわたしたちの共通の視点が不足していることが課題として残された。

そこで、わたしたちは昭和61年度からの研究の方向を探るに当たって、これまでの研究の流れ、本校教師の願い、子供を取り巻く親や社会の願い、子供の実態、時代の要請の5つの視点から子供たちをとらえ、問題点の集約、課題の明確化を試みた。その結果、子供たちがわたしたち同様、この社会の中でいかに相互援助的関係の中で生きているのか、また、その相互援助的な関係において、いかに様々なかかわり合いに関する課題を抱えているかを再認識させられた。本校の学部教育目標あるいは、様々なニーズとして出された「基本的生活習慣」「言語・数量能力」「集団参加能力」等も、この相互的援助関係をより豊かにし、援助していくものであると考えることができる。そして、人が社会的存在であり、生涯を通して外界とのかかわり合いの中で生きていくこと、さらに、上記の諸々のスキルがいずれも、人あるいは物とのかかわり合いの中で獲得されていくということもできる。そこで、わたしたちは、まさしくかかわり合いを豊かにしていくところこそが、今後の教育及び社会情勢の中で生きていく子供たちの生涯を見据えたときの、基礎・基本にあるものと考え、「かかわり合いの豊かな子供をめざして」という研究主題を設定した。

この研究においては、子供たちのその時々のかかわり合いをどう理解するかという点に大きく力を注ぎ、かかわり合いの豊かさをみる指標として、「意図性」「調整度」「協約性」の三指標を作成するとともに、かかわり合いを支えるものとして、「身体」「情緒」「認知」の三基盤を置き、それらの視点を基に、「かかわり合いの豊かな子供をめざして」の指導法について探り、深めてきた。その成果として、全教師が子供を理解する際の共通の視点を持てるようになったとともに、子供一人一人の持つ「できる」力をより「する」力へと向かわせるための教師の在り方、あるいは、状況の設定の仕方といった、かかわり合いの豊かさを目指す一つのアプローチの方法を探りだすことができた。しかし、断片的な事例研究を中心にしてきており、般化するだけの資料には、まだ不十分な状態であった。

一人一人へのアプローチの仕方が違ってくるのは当然であり、どの子供にも、どの場合でも通じる一般的な手立てはないと思われるが、子供たちのもつかかわり合いの課題に日々直面する中で、この研究で得られた成果を、今後、どの子供にも生かしていけるような取り組みへと発展さ

せたい。さらに、これまでの指導計画に盛り込まれてきた内容について、前述の共通した見方を基に、より深く掘り下げ、見直してみる必要がある。このようなことが、わたしたちの教師の意識として強く浮かび上がってきたのである。

折しも、学習指導要領の改訂が行われたことにより、より指導計画の内容を見直す必然性が高まってきたのである。わたしたちは、前回の研究主題「かかわり合いの豊かな子供をめざして」を設定する際、臨時教育審議会の答申をよりどころに、将来の教育及び社会の情勢を見つめ、かかわり合いを豊かにしていくことが、今後の教育及び社会情勢の中で生きていく子供たちの生涯を見据えたときのベースになるものであると考え、また、「かかわり合いの豊かな姿」を、わたしたちは「自分の能力を最大限に生かして、よりよい意図の方向でより高い調整度や協約性で外界とかかわっていく姿」、つまり、その時々状況に意図を向け、一連のまとまりをもった行動をスムーズに展開し、状況に応じた適切な受信・発信行動を行うようになることととらえたのである。子供は生きるすべを探して、人や物とかかわっているわけであるが、たとえ能力は小さくとも、その子なりのかかわり合いの豊かな姿というものは、いろいろな場面で見ることができる。そして、それは一人一人が自分の能力を使いこなしている、換言すれば、「できる」から「する」に向かったときに感じ取れる姿であり、このようなかかわり合いにおいてこそ、生きる上での様々なスキルを獲得し、自立的に生きていくようになるものと考ええる。

このようにとらえるとき、「かかわり合いの豊かさ」を目指していくことは、とりもなおさず、「自主的・自律的に生きる」「学ぶ意欲をもち、主体的に生きる」「他者との関係を深める」ということとなり、今回の改訂の方針と方向を一つにするものであると言える。（今回の改訂とかかわり合いとの関連については、後で詳しく述べていくこととする。）

わたしたちは、上述したように、これまでの研究の流れ及び、今回の学習指導要領の改訂等から、次の研究主題を設定した。

研究主題

かかわり合いの豊かな子供を育てる教育課程の編成

## 2 研究の内容と方法

わたしたちは、「かかわり合いの豊かな子供を育てる教育課程の編成」に当たり、まず、法令や学習指導要領や教育課程に関する研究を行い、次に子供の実態と課題の明確化に努め、「かかわり合いの豊かな子供を育てる」ためには、どのようにすればよいかという理論、実践からの研究も併せて行うことにより、本研究を進めていった。

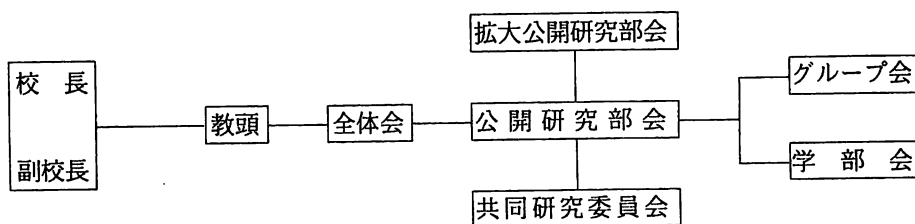
なお、この研究の主な内容・方法を挙げると次のようになる。



主 な 研 究 内 容	研 究 方 法
教育課程，新学習指導要領の研修	各学部で研修を行うとともに，講師を招いての全体研修を行う。
子供の実態把握と課題の明確化	辰見ビネー式知能検査，S－M社会生活能力検査，津守式乳幼児精神発達検査を行い，子供の課題の明確化を図る。
現教育課程の全体構造の見直し	教育目標を見直し，指導内容を選択・組織し，指導の形態について検討し，教育課程の全体構造を作成していく。
「かかわり合いの豊かな子供を育てる」ための理論及び実践研究	公開研究部を中心に理論をまとめ，それを全体会で審議した後，生活単元学習で実証授業を行い，更に「かかわり合い」に関する理論を深める。
年間指導計画の見直し，作成	小・中・高の一貫性を図るために，各領域・教科等の指導の形態ごとにグループ会を設定し，検討を加える。

なお，研究組織については次に示すとおりである。

【研究組織】



- \* 拡大公開研究部会：三役，主事，公開研究部員
- \* 共同研究委員会：大学講師，拡大公開研究部会のメンバー

本研究は4年間計画で行うものであり，年間の研究内容はおおまかには，次のとおりである。

○ 1年次（平成2年度）

- ・ 1，2学期…「かかわり合いの豊かな子供を育てる教育課程の編成」の基礎研究指導計画作成にいたるまでの諸々の研究。
- ・ 3学期…領域・教科を合わせた指導の中の「生活単元学習」の年間単元配列および，1学期の指導計画作成。

○ 2年次（平成3年度）

- ・ 領域・教科を合わせた指導の年間指導計画作成
- ・ 生活単元学習を通しての検証授業（実践研究）
- ・ 中間発表としての公開研究（生活単元学習の実践を通して）

### ○ 3年次（平成4年度）

- ・教科別指導，領域別指導の年間指導計画作成
- ・検証授業（実践研究）

### ○ 4年次（平成5年度）

- ・指導計画の完成
- ・研究のまとめ（まとめとしての公開研究）

## 3 教育課程編成に向けて

### (1) 学習指導要領の改訂を受けて

教育課程を編成するに当たっては，今回の学習指導要領の改訂の趣旨を十分踏まえるとともに，創意工夫を加え学校の特色を生かした教育課程を編成することが大切である。今回の改訂の基本的なねらいとして，これからの社会とそれに伴う児童生徒の生活や意識の変容に配慮しつつ，生涯学習の基礎を培うという観点に立ち，21世紀を目指し，社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を図ることが挙げられ，教育課程の基準の改善のねらいとして，4つの柱が示されている。当然，本校においても，4つの柱を踏まえて教育課程を編成しなければならない。そこで，4つの柱を本校ではどのようにとらえているかについて述べてみたい。

#### 【心豊かな人間の育成】

教育活動全体を通じて，児童生徒の発達段階や各教科等の特性に応じ，豊かな心をもち，たくましく生きる人間の育成を図ること。

学習指導要領では，学校教育の現状や児童生徒の実態を考慮して，これからの社会において，豊かな心をもち，たくましく生きる人間の育成を図るという観点から，自主的・自律的に生きる力を育てることを目指している。そして，このようなことを目指していくために，学校教育で重視すべき内容として，次のように示している。

- ・真理を求める心，感動する心
- ・基本的な生活習慣，社会規範を守る態度
- ・生命尊重の心，思いやる心
- ・自律・自制の心，意志力，実践力
- ・感謝の心，尽くす心
- ・自分の生き方に目を向ける態度
- ・すこやかな精神と身体

本校の子供たちを含め，精神発達遅滞児は，素直な心・純粋な心をもった子供たちであるが，反面，自己中心性が強く相手の立場になって考えることが難しかったり，認知・思考の特性，ないしは概念学習の未熟性などから，興味・関心が広がりにくい，一定の規範をもつ社会生活においては道徳性に欠く，最後まで頑張り通すといった意志力，実践力に乏しいといった行動特徴が見られる。

先に示した，真理を求める心，感謝する心……といった7つの事項をもったものが，豊かな心の人間であると考えるとき，わたしたちは，子供たちがもっている素直な心・純粋な心をかけがえのないものとしてとらえるとともに，基礎・基本の重視と個性を生かす教育の充実を図り，自

ら判断し行動できるたくましく生きる人間、つまり、自己教育力を身に付けた人間を育てていかなければならない。そのことが、心豊かな人間を育成していくことになると思う。したがって、心豊かな人間の育成に当たっては、基礎・基本、個性を生かす、自己教育力の育成といった観点から、指導内容や指導方法を探っていく必要があると思う。

#### 【基礎・基本の重視と個性を生かす教育の充実】

国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育を充実するとともに、小学部から高等部までの各教科の内容の一貫性を図ること。

基礎的・基本的な内容は、それが児童生徒一人一人にしっかりと身に付き、その後の学習や生活において生きて働くものとなってこそ意味があるものである。また、個性を生かす教育の充実とは、一人一人の子供の個性をかけがえのないものとして積極的にとらえ、それをよりよい方向へと生かしていくことを目指すものであり、基礎・基本の重視と個性教育の推進との関係は、基礎的・基本的な内容を指導する過程を通して、また、基礎・基本を基盤にして、それぞれ個性を生かす教育の充実を目指すという形で関係づけられる。

本校の子供たちにとっての、基礎・基本といった場合、よりよく生活していくために必要な、知識、技能、態度といったものを身に付けるための一つ一つの内容が、基礎的・基本的な内容として考えられる。

確実に身に付けるべき基礎的・基本的な内容は、子供の心身の発達段階や興味・関心等、及び学習指導要領の解説書に示されている「各教科の具体的内容」を参考にしながら、また、小学部・中学部・高等部の12年間の一貫性を図りながら、一層精選していかなければならない。更に、実際の指導においては、個の発達段階を的確におさえ、個に応じた指導の内容や方法を工夫することで、一人一人の子供の特性等を最大限に伸ばしていくことが大切であると思う。

#### 【自己教育力の育成】

社会の変化に主体的に対応できる能力の育成や創造性の基礎を培うことを重視するとともに、自ら学ぶ意欲を高めるようにすること。

これからの社会に対応し生きていくためには、社会の変化に主体的に対応できる能力や態度の基礎を培うことが大切である。また、今日、生涯学習体系への移行が求められており、これからの学校教育においては、生涯学習の基礎を培う観点から、自ら学ぶ意欲と主体的な学習の仕方を身に付けることが大切である。そして、そのためには、子供に活動や学習への適切な動機を与え、学ぶことの楽しさや成就感を体得させるようにしなければならない。このことが、自ら学ぶ意欲となり、ひいては生涯を通して学び続ける人間の育成へとつながると考える。

そこで、わたしたちは、子供たちが積極的に課題に取り組み、学ぶことの楽しさや成就感を体得できるように、一人一人の発達段階や興味・関心等に即した内容を準備し、体験的な活動や問題解決的な活動として組織していくことが必要であると思う。更に、活動や学習を展開してい

く過程においては、教師のかかわり方や教材・教具の提示の仕方といった指導方法を工夫することにより、主体性や自主性を引き出せるようにし、自ら学ぶ意欲を育てていかなければならない。

#### 【文化の伝統の尊重と国際理解の推進】

我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視するとともに、世界の文化や歴史についての理解を深め、国際社会に生きる日本人としての資質を養うこと。

国際化が進む中であって、21世紀に生きる日本人を育てるためには、これからの学校教育において、諸外国の人々の生活や文化を理解し尊重するとともに、我が国の文化と伝統を大切にする態度の育成を重視していく必要があるが、本校の子供たちの実態からして、これらの内容を到達目標として直接的に与えることはできず、一つの目指す方向として考えていかなければならない。その中で、文化の伝統の尊重と国際理解の基盤として、まず、身近な人との間で互いの意図や気持ちを伝え合い、受け止め合う中で信頼関係を築き、対人関係や集団参加の力を伸ばしていくことは大切であるとする。また、身近な自然や社会の中で感動的な体験活動を積み重ねていくことが、ひいては、我が国の文化と伝統を尊重する態度へと発展していくと考える。

以上、教育課程の基準の改善の4つの柱について、本校なりの解釈を加えてきたが、これらは相互に関連しており、構造的には混然一体をなすものとしてとらえる必要がある。したがって、各項においては、その内容が重なりあっているものが多いと言える。

精神薄弱養護学校における教育課程の改善として、これらの教育課程の基準の改善の4つの柱を踏まえ、早期教育の充実を図るための「幼稚部教育要領の作成」。障害の多様化に応じるための「児童生徒の心身の障害の状態に応じた指導の一層の充実」。社会参加・自立の推進を図るための「高等部における職業教育の充実」といった、方針が打ち出された。その中の「児童生徒の心身の障害の状態に応じた指導の一層の充実」においては、小学部の各教科の内容を発達段階に応じて、3段階に分けて示してあることと、養護・訓練の内容等の再構成の二つの重要な改善点が示されている。わたしたちは、改善の4つの柱やこれらの精神薄弱養護学校における改善の柱を十分踏まえ、教育課程の編成を行わなければならない。

## (2) 子供の実態

教育課程は、学校の教育目標の達成を目指して編成されるものであり、学校の教育目標を設定する際には、子供の実態を十分考慮しなければならない。そこで、本校の教育目標を設定するに当たって、次のような実態を考慮していった。

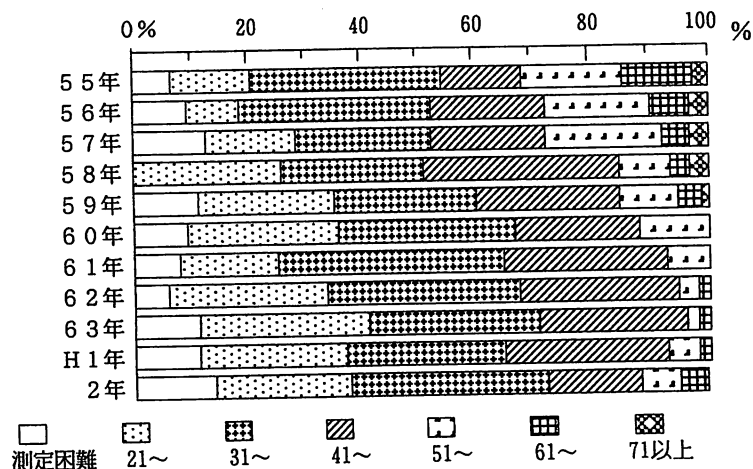


図1 知能指数分布の推移

表1 知能指数段階別児童生徒数

(平成2年5月現在)

学部 学年	小学部						中学部			高等部			合計
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	1	2	3	
測定困難			1		1		1		1	2	1	1	8
21~30						1	1	2	1	3	4	4	16
31~40	2	1	1	1	1	1	3	2	2	2	4	1	21
41~50	1	2	1	2	2	1			1	1		4	15
51~60			1				1	1		2	1		6
61~70	1								1				2
71以上													0

表2 障害の原因

(平成2年5月現在)

	小学部	中学部	高等部	合計
染色体異常 (ダウン症候群)	8	2	5	15
胎生時障害	0	4	4	8
出生時障害	0	1	3	4
出産後障害	2	2	4	8
原因不明	11	8	14	33
自閉児(再掲)	7	6	4	17

表3 卒業生の進路

	入学時人数	授産施設	更生施設	家事手伝い	就 職	福祉作業所その他
昭 和 58年	10		1	1	5	2
59年	10				8	2
60年	4				4	
61年	9		1		1	3
62年	10		3		6	
63年	10	2		1	4	2
平 成 元 年	10	3		1	4	

表4 通 学 状 況

(平成2年5月現在)

		小 学 部	中 学 部	高 等 部	合 計
自 主 通 学 ( 一 人 通 学 )	徒 歩	1	3	3	7
	バ ス ・ 電 車 等	2	7	26	35
付 添 い 通 学	徒 歩	1	0	1	2
	バ ス ・ 電 車 等	12	3	0	15
	自 家 用 車	5	4	0	9

これらの図や表からも分かるように、本校は障害の程度においては、中度の子供が多いものの、I.Q測定困難の子供から、I.Q60前後の子供までとなり能力差の大きい子供が在籍しているという現状である。また、障害の種類もダウン症候群や自閉児を中心に多様である。本校においては、教育実践研究のために障害の程度・障害の種類等を考慮して入学選考を行っているため、今後もこのように発達差の大きい子供、並びに様々な障害種の子供が在籍することが予想される。

中学部・高等部においては、I.Q21～40の子供が6割以上を占めているが、中学部や高等部に入学する生徒の中に、特殊学級や普通学級からの入学者も多いことから、実際には生活経験の違いも大きく、かなりの発達差が見られる。特に高等部においては、その傾向が著しい。

このように、障害の程度が重い子供から軽い子供まで、かなりの発達差の大きい子供たちが在籍していることから、学校の教育目標を設定するに当たっては、重度の子供から比較的軽い子供まで包含するような弾力的内容、長期的展望を考慮していかなければならない。また、学校教育全体を通して、児童生徒の障害の種類と程度に応じた教育の一層の充実を図っていかなければならないと考える。

### (3) 本校の教育目標

科学化や情報化、あるいはめざましい国際化の状況に、進んで対応し取り組んでいける心身共に健康な人間の育成を図っていくことが、これからの学校教育の課題である。学校の教育目標を設定するに当たっては、これからの学校教育の課題や、今回の学習指導要領の改定の趣旨に基づき、生涯学習の基礎を培うという観点から、これからの学校教育を推進するうえで、(1)で述べた教育課程の基準の改善の4つの柱を踏まえ、子供の実態や親の願い等を考慮して設定していった。

本校には、障害の程度の重い子供から比較的軽い子供まで在籍しており、卒業後の進路も企業への就職、施設関係、作業所関係、家事手伝いと多様化してきている。また、それぞれの進路先において、人間関係での問題や基本的な生活習慣の問題など、様々な問題も生じてきている。

そこで、本校の教育目標は、これまで述べてきたことを踏まえるとともに、小学部・中学部・高等部の12年間の一貫教育を行うという立場から、一人一人の発達段階を的確にとらえ、個に応じた指導内容や方法を充実させ、一人一人の子供のもつ発達の可能性を最大限に伸ばしていくことを第一義におき、更に、家庭生活や社会生活に自立できる児童生徒を育成することを指向していこうという、いわゆる方向目標の形で表した。

また、小学部・中学部・高等部のそれぞれの学部目標は、上記のような立場で設定する本校の教育目標を達成するための具体的な指標となるようにする。その際、各学部の教育目標は、子供の実態や各学部の位置付け等を考慮し、系統性や一貫性を図って設定した。

#### 【学校教育目標】

個々の発達段階を的確にとらえ、特性等を最大限に伸ばし、人間性豊かで、家庭生活や社会生活に可能な限り自立できる児童生徒を育成する。

#### 【高等部教育目標】

心身の調和的な発達を図るとともに、家庭生活や職業生活に必要な基礎的・基本的な事柄や勤労を重んずる態度を身に付けさせ、社会生活によりよく参加し、自立できる生徒を育成する。

#### 【中学部教育目標】

小学部で培われた基礎的・基本的な能力や態度を一層伸ばすとともに、心身ともに健康でたくましく、集団生活に進んで参加し、働くことに対する基礎的・基本的な態度を身に付けた生徒を育成する。

#### 【小学部教育目標】

心身の調和的な発達を図りながら、健康で明るく、日常生活に必要な基礎的・基本的な生活習慣や知識、技能、態度を身に付けた児童を育成する。

○ 具体目標及び各学部の努力点

学校の教育目標の達成の具現化を図るため、4つの具体目標を立て、それぞれについて12年間の一貫教育を行う立場から、小学部・中学部・高等部の系統性を考慮して、各学部の努力点を次のように設定した。

表5 具体目標及び各学部の努力点

具体目標		小学部	中学部	高等部
1 健康な体をつくる。	努力点	1 環境を整え、遊びや運動を積極的に取り入れる。 2 児童の一つ一つの行動に反響的にかかわるようにし、情緒の安定を図るようにする。	1 自ら運動に取り組む態度を育て、体力の向上を図る。 2 ゆとりのある、安定した学校生活のための環境づくりに努める。	1 健康・安全に関する基礎的・基本的事項の理解を深め、自主的に体力向上に努力する態度を育てる。 2 心身の健康増進に努める。
2 基本的生活習慣の能力と態度を養う。	努力点	1 個々の実態に応じて衣服の着脱、食事、排せつ等の身辺処理に関する基本的事柄を可能な限り身に付けさせる。 2 自分の身の回りのことは自分でしようとする態度を養う。	1 身辺処理に関する基本的事柄の定着化を図る。 2 日常生活を積極的に送ろうとする態度を養う。	1 身辺処理に関する基本的事柄の一層の習慣化を図る。 2 性教育の充実を図る。
3 集団生活に必要な能力と態度を養う。	努力点	1 みんなと一緒に活動することの楽しさや喜びを味わわせる。 2 学級を中心に遊びやあいさつ、役割、手伝い、決まり等、集団生活に必要な基本的事柄を身に付けさせる。	1 対人的かかわり合いを豊かにし、集団生活の楽しさを味わわせる。 2 集団生活において積極的に自分の役割を果そうとする態度を育てる。	1 団体行動に必要な事柄を身に付けさせ、集団生活の喜びを味わわせる。 2 集団生活において役割分担や役割意識を持たせ、責任感や協調性を育てる。
4 家庭生活や社会生活に必要な能力と態度を養う。	努力点	1 幅広い体験を通して、身近な自然や社会についての興味・関心を広げる。 2 日常生活や身近な社会生活においてよく使用したり、触れたりする事物、事象やことは、かず等についての基本的事柄を身に付けさせる。 3 家庭との連携を深め、身辺処理の能力、態度の向上を図る。	1 体験的学習活動を重視し、興味・関心の対象を広げる。 2 働くことの喜びや大切さを分からせるとともに、社会のしくみについて関心を持たせる。 3 家庭との連携を深め、生徒指導の充実を図る。	1 社会のしくみや出来事について関心を持たせ、特に体験的活動を通して、家庭生活や職業生活に必要な知識、技能、態度を身に付けさせる。 2 働くことに対する意欲を高め、勤労を重んじ奉仕する態度を養う。 3 家庭との連携を深め、自分の進路について関心を持たせる。



#### 4 かかわり合いの豊かな子供を育てるために

教育課程は、前項で述べた本校の教育目標の達成を目指して、その具現化を図り編成することは言うまでもない。わたしたちは、「1 研究主題設定」のところで述べたように、人が社会的存在であり、生涯を通して外界とのかかわり合いの中で生きていくこと、また、本校の学部教育目標あるいは、様々なニーズとして出された「基本的な生活習慣」「言語・数量能力」「集団参加能力」等の諸々のスキルがいずれも、人あるいは物とのかかわり合いの中で獲得されていくものであり、家庭生活や社会生活において人や物との豊かなかかわりを展開できることが、自立への根幹をなすものであることから、かかわり合いの豊かな子供を育てることこそが、「個々の発達段階を的確にとらえ、特性等を最大限に伸ばし、人間性豊かで、家庭生活や社会生活に可能な限り自立できる児童生徒を育成する。」（本校の教育目標）ことの具現化につながるものと考ええる。

##### (1) かかわり合いに関する子供の実態

わたしたちは、子供たちの実態を把握するために、S-M社会生活能力検査、津守式乳幼児精神発達検査を行い、領域別の比較、それぞれの領域の下位項目の通過率を調べ、それにより、子供たちの人や物とのかかわり合いの実態を見てみた。

下の表は、それぞれの領域における児童生徒の発達年齢を便宜上、2歳以下・3歳～4歳台・5歳～6歳台・7歳以上の4つに分け、それぞれに占める割合を学部別に表したものである。

表6 S-M社会生活能力検査

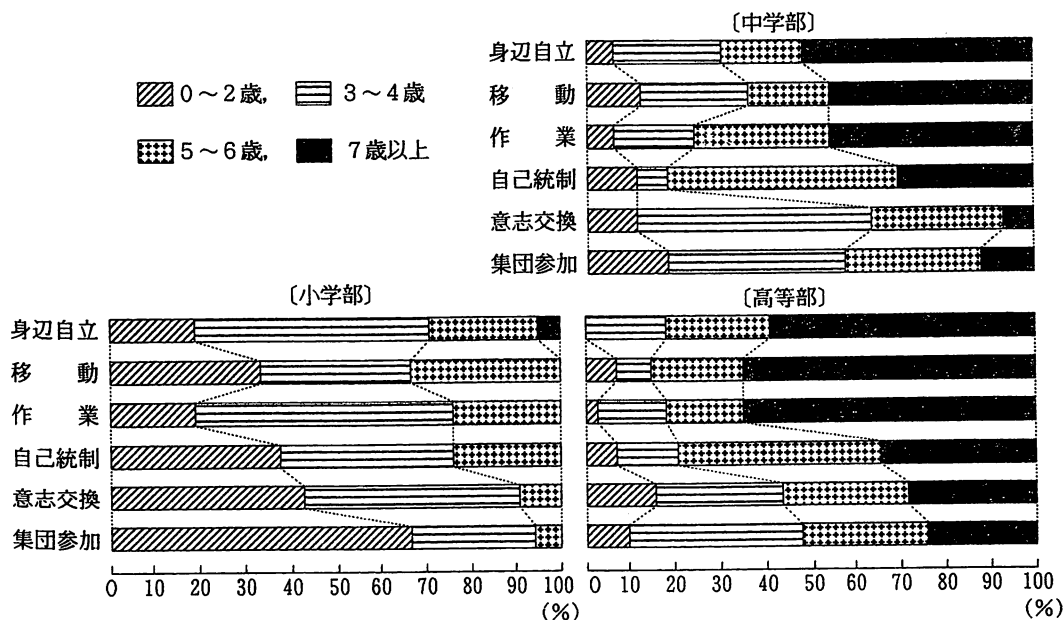
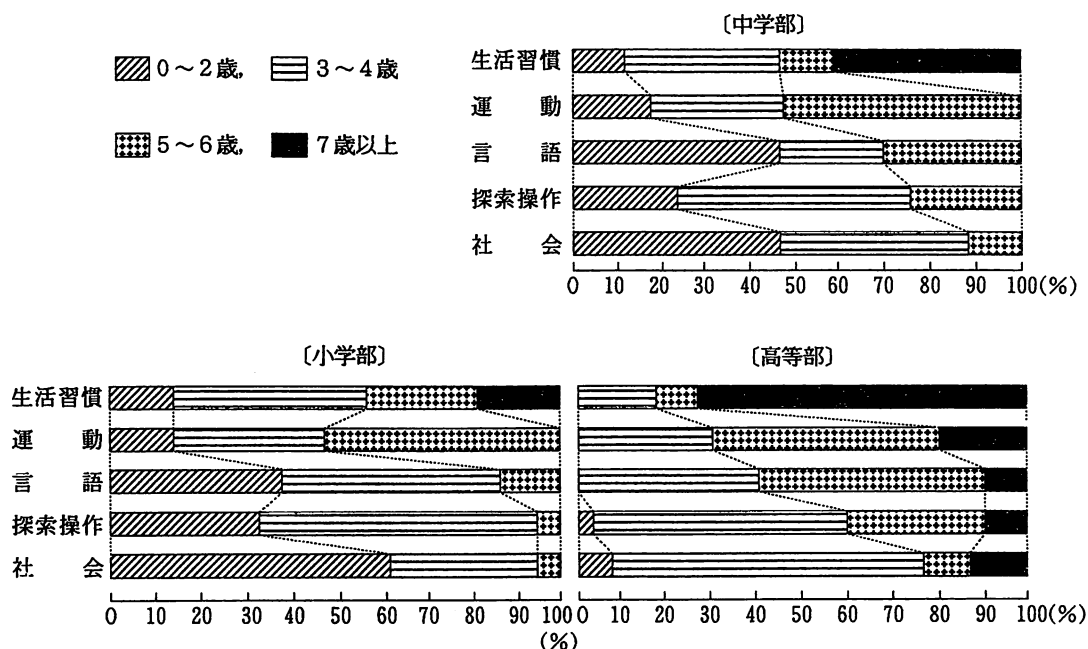


表 7 津守式乳幼児精神発達検査



両検査結果を見てみると、どの学部においても、生活習慣や身辺処理に関しては発達年齢が高いが、「意志交換」「集団参加」「社会」といった人とのかかわりを必要とする領域は、低くなっている。中学部、高等部になると、7歳以上を示す割合が急激に増えているが、これは、特殊学級等からの入学者が5割程度を占めているためであると考えられる。

各学部とも、「意志交換」「集団参加」「社会」といった領域が外の領域に比べ、5～7歳台の占める割合が少ないということは、各学部とも、人とのかかわりを必要とする領域に課題があると言える。また、「生活習慣」や「身辺自立」など、毎日の繰り返しの指導によって、子供たちも自然と身に付けていっていることが予想されるが、「意志交換」「集団参加」「社会」など、人とのかかわりに関する領域はその発達を促すことが難しく、これからの指導に工夫・改善を加えていかなければならないことを物語っている。

発達年齢の低くなっている領域の下位項目を見てみると、「意志交換（言語面）」においては、「……しょうか」と誘いかけたり、友達に「かして」と言ったり、遊びに加わるとき「いれて」と言うなど、自分から友達にかかわりを求めるようなことばが使えない。また、見たこと、したことなどを先生や友達に伝える項目においても通過率が低い。「集団参加」においては、誘われれば遊び仲間に入れるものの、自分から友達と一緒に遊びを楽しむような項目においての通過率が低い。また、社会性においても、友達と一緒にごっこ遊びを楽しんだり、役を交代しながら遊びを楽しむような項目においてのつまずきが見られる。

## (2) かかわり合いの豊かな子供とは

わたしたちは、これまで「かかわり合いの豊かな子供をめざして」という研究主題の下、その指導方法の研究を行った。その中で、かかわり合いの豊かな姿を「自分の能力や適性を最大限に生かして、よりよい意図の方向でより高い調整度や協約性で外界とかかわっていく姿」としてとらえ、その時々のかかわり合いを意図性・調整度・協約性で見えてきた。

今回の研究である「かかわり合いの豊かな子供を育てる教育課程の編成」では、どのような教育活動を準備し、どのように教師がかかわっていけば、子供たちのかかわり合いは豊かになっていくかという研究であり、言い換えれば、どのような教育課程（指導内容・指導方法を含む）を編成していけば、学校生活や家庭生活においての子供たちのかかわり合いは豊かになるという研究である。

前回の研究が、学習場面を中心にその時々のかかわり合いの豊かさを、三指標（意図性・調整度・協約性）を通して見ることで、その指導法を探ったのに対して、今回は、指導内容を探るということ、また、12年間という学校教育全体の枠組みの中で、かかわり合いの豊かな子供を育てようとするところに前回の研究と違いがある。しかしながら、「かかわり合い」という視点は前回と同じであり、その時々のかかわり合いの豊かな姿が積み重なり「かかわり合いの豊かな子供」が育つということからも、これまでの研究の成果を踏まえつつ研究を進めていかなければならない。

そこで、「かかわり合い」を次のように規定するとともに、前回と今回の研究の共通点や相違点、かかわり合いに関する子供の実態を踏まえた上で、「かかわり合いの豊かな子供」について検討していった。

かかわり合いとは、人が何らかの意図をもって、外界（人や物等の環境）に働きかけ、また、外界からの働きかけに対して、意図的に何らかの行動をすること。

先のかかわり合いに関する子供の実態のところでは、標準検査の結果から、本校の児童生徒のかかわりに関する実態をみたが、ここでは、学校生活における子供の様子と検査結果を対比させながら考察してみたい。

本校の子供たちの休み時間の様子を見てみると、一人で遊びを楽しんでいたりと、決まったパターンの遊びを繰り返していたりしている。また、人とかかわりにおいて、物の奪い合いや、攻撃的な態度、わがままな態度といった自己中心的な態度が見られる。学習場面においては、教師の指示に従うことができて、自分から見通しを持って自主的に行動することができなかったり、友達と一緒に活動する際、機械的な接し方や自己中心的な接し方になったりする。さらに、興味・関心のある活動で自ら活動する場面では、積極的に参加するものの、自分の順番まで待つ

とか、話を聞く、最後まで頑張り通すといった状況においては、不適応行動を示すことがある。

このような、かかわる対象の偏りとか、自己中心的な態度、耐性の弱さなど諸々が、かかわり合いを妨げている要因として考えられるし、そのことが、「意志交換」「集団参加」「社会性」などの落ち込みとして検査結果に現われていると言える。

子供のかかわり合いに関する実態から考えるに、子供が自分からいろいろな人や物に積極的にかかわり、そのかかわりの中で生起する様々な欲求を、相手の立場や自分の置かれている立場などその時々状況を認知し、判断して、状況に応じた行動へと調整できるようになったとき、その子供のかかわり合いが豊かになったと言えるのではなかろうか。そこで、わたしたちは、子供の実態やこれまでの研究等を踏まえ、「かかわり合いの豊かな子供」を次のようにとらえることとした。

かかわり合いの豊かな子供とは、自分の特性等を最大限に生かし、いろいろな人や物と、状況に応じたかかわりを展開できる子供。
---

ことばを有しているにもかかわらずそれを状況に応じて十分生かせなかったり、ボール遊びが好きなのに、友達をボール遊びに誘うことができなかったり、優しい心を持っているのにそれを十分発揮できないなど、自分の特性等をかかわりの中で生かしきれない子供。このような子供に対してわたしたちは、その子供の特性等を最大限に伸ばし、可能性としての自分の力、つまり「できる力」を十分に発揮して、いろいろな人や物に積極的にかかわり、状況に応じたかかわりを展開できる子供を育てていきたいと考える。

ここで言う「状況に応じたかかわり」とは、どのようなかかわりを意味するのか、以下説明を加えることとする。

人はかかわり合いの中で、様々な欲求を持つが、その欲求が直ちに解消される状況はまれである。例えば、食べたいものがあったとしても、すぐには食べられなかったり、走り回って遊びたいのに、静かにしていなければならなかったりと、学校生活において、自分の欲求が満たされないことが多々ある。このような状況において、精神発達遅滞児は、一般的に欲求を調整する力が弱いと言われ、パニック状態に陥ることもよくある。わたしたちは、その時々生起する欲求に対して、子供たちがその欲求を調整し、環境との調和的な関係においてかかわり合いを展開することを、状況に応じたかかわりであるととらえている。

欲求の調整といえば、我慢するといった耐性が主に考えられるが、単に我慢することのみならず、自分のおかれているその状況を的確に判断したり、相手との共感的理解に立ったり、自己実現に向けての欲求の調整といったより高次の欲求の調整があると考えている。人が社会の一員として生活を営む上では、この欲求の調整が環境との調和的な関係においてなされなくてはならないし、そこに、教育の意義も見出されてくるであろう。

### (3) かかわり合いを豊かにするために

前述したように、わたしたちは、かかわり合いの豊かな子供を「自分の特性等を最大限に生かし、いろいろな人や物と、状況に応じたかかわりを展開できる子供」ととらえ、自分の持っている「できる力」を十分発揮し、いろいろな人や物に積極的にかかわり、環境との調和的な関係において欲求の調整を行うといった、状況に応じたかかわりを展開するかかわり合いの豊かな子供を目指している。では、積極的なかかわり、状況に応じたかかわりといったことに対して、どのような視点からアプローチしていけばよいのであろうか。

藤原喜悦は、「環境のさまざまな事象に対して自発的、積極的なかかわりをもつ」「さまざまな衝動を自律的に統制し、状況に即応した充足をもたらす」といったものが「自我の働き」であると言っている。わたしたちが、かかわり合いの豊かな子供を、積極的なかかわり・欲求の調整による状況に応じたかかわりで見ていこうとすると、まさしく、この「自我」の働きが、かかわり合いを豊かにするためのキーワードとなるのではないだろうかと考えた。

そこで、わたしたちは、「自我」に関する文献研究を行い、自我とかかわり合いとの関連を探っていくこととした。この自我の研究を進めていく中で、わたしたちは、自我の概念が学説の立場や理論の立て方等によって、いかに様々な規定がなされているかを知り、本校なりの自我のとらえ方を明確にしていく必要性を実感した。また、自我の研究の中で、今回の改訂の趣旨並びにこれからの社会に求められている子供像といったものが、人間の徳育、つまり、人格形成を重視していることから、自我との関連が密接なものであることの認識を深め、自我の研究の意義を更に確信するにいたった。

さて、本校では自我をどのようにとらえるかについてであるが、わたしたちは、かかわり合いを豊かにするという研究の立場から、自我を次のようにとらえていくこととした。

子供たちのかかわり合いの様子を見てみると、自分の考えや意見をうまく相手に伝えられなかったり、慣れない状況において自分の力を発揮できないなど、自分自身を表情や身振り、ことばなどで表せない子供がいる。また、自分の意見や考えを主張することはできても、自己中心的で相手のことや状況を考慮して、状況に応じた調整が難しい子供もいる。そのことを二人の子供の例で述べてみると、A子さんは、特定の人とはかかわりを持って、「おしゃべりやさん」だが、慣れない人や慣れない状況では、自分自身を表現し、積極的にかかわる様子を見せてくれない。また、B君は、積極的に自分からかかわっていくが、自己中心的で相手のことなどおかまいなし、欲しければ力づくでも奪い取ってしまう。このようなかかわりを見せるA子とB君。A子さんがいろいろな場面で積極的なかかわりを展開できたり、自分を表現できたり、B君が相手のことを考えかかわっていくことができるようになることが、「自分の特性等を最大限に生かし、いろいろな人や物と、状況に応じたかかわりを展開できるかかわり合いの豊かな子供。」であると考え

ることから、自我を「自分自身を表現し積極的にかかわる」といった、自発性・積極性を司る面。「周りとの関係を考慮し、状況に応じた欲求の調整を行う」といった、他者との関係において自分の行動の調整を司る面の二つの働きで自我を見ていく必要があると考えた。

その自我の二つの働きを具体例で述べると、「ぼくがします」「〇〇君、遊ぼう」「先生あのね…」「ぼくもやってみよう」「ぼくは、こう思います」など、自分自身を表現し積極的にかかわる働きと、「ぼくも使いたいけど、貸してあげるよ。」「一緒に仲良く遊ぼうね」「かわいそうだからしないよ」「この仕事はきつけれど、最後まで頑張らないと。頑張ってみんなに認めてもらいたいんだ。」といった周りとの関係を考慮したり、自己実現化に向けて欲求の調整を行ったりという自我の二つの働きである。

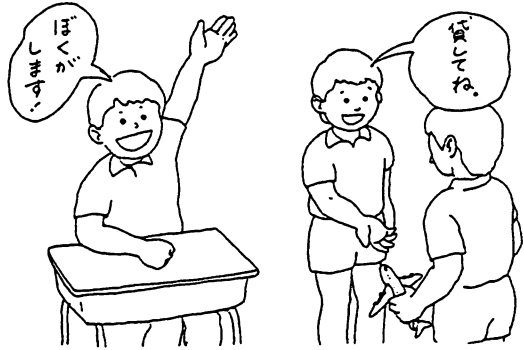


図2 自我の二つの働き

このように、自我を二つの働きで見ていこうとするわたしたちの自我のとらえ方は、「自我」を主体的なもの、「自己」を対象的なものと区別して使われる場合も多い中で、「自我」と「自己」を同義語的にとらえ、同一的存在として、自我そのものを幅広くとらえたものであると言える。また、現在の社会に求められている子供像、言い換えるなら、かかわり合いの豊かな子供が人格の形成を目指しているということから、人格の中核に自我があるという立場で自我をとらえた。

以上のようなことから、わたしたちは、自我を「個々の心理的要因を統合して体系的な働きをさせるものであり、人格の中核をなすもの。」であるととらえ研究を進めた。

ここまで、かかわり合いを豊かにしていくために、自我に焦点を当てたこと、並びに本校の自我のとらえ方について述べてきたが、次に自我の発達を促すには、具体的にどのような援助を行っていかねばならないかについて、「積極的にかかわったり、自分自身を表現したりできる」「周りとの関係を考慮し、状況に応じた欲求の調整を行う」とこと関連の大きい「自我関与」と「自己の意識化」といった視点から援助の在り方を探っていくこととした。

#### 〔自我関与を促すために〕

津守真が「子供は、自分自身が心ゆくまで活動するときに、そのときの能力を最善に用いることができ、また、自分自身に出会う。そのとき、子供は自己実現しながら自分自身の個性的な自我をつくりあげる。」と言っているように、子供が身の周りの事物・事象に興味・関心を示し、

主体的に活動に取り組み、満足感や成就感といった自己実現の喜びを味わうことが、人格の中核をなすものを揺り動かすと考え。言い換えれば、人格の中核である自我の形成を促していくということである。

そこで、わたしたちは、主体的に取り組む観点として、人間の行動を積極的にし、主体的で自信のある一貫した態度を生み出し、認知・判断・態度・行動・学習などに大きな影響を与えるとされる「自我関与」で見ていくこととした。（ここで言う「自我関与」とは、適度な自我関与的状况を示すものであり、以下同様に用いている。）

自我関与とは、「個人にとって重大な関心のある事象や事態に対して、その個人がかかわりをもち、反応的な状態を示すとも、課題関与が個人のパーソナリティの中心部位においてなされる状態を言う。」（藤原喜悦）

この自我関与が促されることにより、子供が主体的に人や物とかかわることができ、その中で自我の発達が促されると考える。それでは、自我関与の促進を図るためには、どのような教育的援助が必要であろうか。

まず言えることは、学習内容が、子供の欲求体系や心身の発達段階、興味・関心に即したものでなければならないということである。学習内容が、その子供の発達段階より極端に低いものであれば、自我関与は高まらないし、また、逆に内容が高すぎても自我関与は高まらない。更に、興味・関心にそぐわないものであっても、自我関与は高まらず主体的な活動は望めないであろう。

そこで、自我関与を促進していくには、子供一人一人の欲求体系や心身の発達段階、興味・関心などに基づいた教育内容を準備し、個に応じた指導を充実していき、一人一人が満足感や成就感といった自己実現の喜びを味わえるよう配慮していく必要があると考える。また、実際の活動においては、机上での間接的経験より、五感や手足・体全体を使って、自分のもっている力を精一杯発揮し、心ゆくまで活動できるような場や、直接的な経験の場を設定していきたい。本校の子供たちにとって、直接見たり、触れたりして、体全体を通して満足感や成就感を味わうことは、自我関与を促進する上でも大切であると考え。

次に、自我関与が一般の動機、動因と同じように、経験や行動に影響を及ぼすという面から見てみたい。例えば、空腹のための食事をとるとき、空腹を満たすためにのみ食事をとるのであるなら、それは生理的欲求によって規定されている。食事をとることに自我が関与しているなら、どんなレストランで、なにを、だれと共にするか、ということが規定される。また、自分として恥ずかしくない食事のとり方をしようとする。

この例から考えるに、レストランに行った経験があるか（先行経験）、レストランはどのような所か、どのような食べ物があるか（知識）、ナイフやフォークが使えるか（技能）どのようなマナーで食べようとするか（態度）など、自我関与が高まるには、経験や知識、技能、態度の体得が大きく影響していると考えられる。

見たい、行きたい、やりたいなどといった、自我関与の高まりは、先行経験の有無によって左右されることもある。したがって、前述したように直接的な経験の場を多く持たせていくことが、自我関与の促進につながると言えるであろう。また、ある程度の知識を身に付けることによ

り、興味・関心といった子供の視野も広がり、自我関与をもつ分野が広がってくると考える。さらに、技能や態度を体得することで、「自分でやってみよう」とする主体的な態度が育つと考える。

このように、知識や技能等を体得することで、自我関与が促進されるし、また、自我関与が促進することで、主体的な態度が育ち、知識や技能面を更に自ら伸ばすことへとつながる。つまり、自我関与が、認知、判断、態度、学習などに大きな影響を与えるのである。このように、自我関与を促進することと、知識や技能等を体得することとは、相互関連的であると言える。

わたしたちは、自我関与を促進するために、子供の欲求体系や心身の発達段階、興味・関心に即した内容を準備し、様々な直接的経験（体験）の場を設けていくとともに、子供にとって最小限必要な知識、態度を体得できるような教育的援助を行っていかねばならないと考える。

#### 〔自己の意識化を促すために〕

子供の人とかかわりは、まず母親から始まり、次第に兄弟とかかわり、幼稚園・学校での友達、先生といった人とかかわりへと発展していく。このようなかかわり合いにおいて、欲求充足の対象となる者の反応の違い、つまり、自分の価値観と違う様々な人との出会いによって、他者の存在に気付き、他者についての感覚と、それに対抗する自己についての感覚を獲得していく。また、人とのことばのやりとりを通して、相手からのことばだけでなく、それにこたえる自らの音声、またそれにこたえる相手のことばといった連鎖を相互関連的に知覚し、自分自身に反応していくことで自己の意識を形成していく。このような意味において、「ことば」は自己の意識化において大きな意味を持つものであると言える。人とかかわりの中で、自分自身に気付くとともに、自分自身としての行動のとり方といった意識化が促されていくことで、状況に応じたかかわり方であるとか、積極的なかかわりといった、かかわりという行動にも大きな影響を与えるものであり、人とかかわりの中において、自己の意識化が促されることにより、自我が形成されていくと考える。

自己の意識化は、まず、自分の身体を操作することにより、自分というものに気付くとともに、かかわりを通して他者の存在に気付いていくことでより自己の意識化が促されていくと考える。また、先生や友達と一緒に活動し、そこでの「やりとり」を通して、子供はする者とされる者の二つの役割を演じ、その中で、子供は相手の人格、他者の人格を発見し、それまで未分化であった自分自身の感受性の内部に他者性を認識し、自己の意識を形成していく。

このようなことから、わたしたちは、自己の意識の形成を促す初期の段階としては、自分自身の身体を操作するような活動を取り入れたり、教師や子供同士のやりとりが図れるような場を多く設定していくことが必要であると考え。また、その際、自己の意識化を促すために、その子のことばや身振りといったコミュニケーション能力の向上を図らねばならないと考える。

このように、まず、身近な人とかかわりを通して自己の意識化が促され、相手の立場や考えを知ることを通して、次第に集団の中における自己の意識化へと発展していく。つまり、集団における自分の置かれている立場や相手の立場を意識し、自分はどのように行動すべきかといった



自己の意識が育つのである。この集団における自己の意識を育てる手立てとしては、役割活動や自分自身を集団の中で表現できる活動を準備してやることが、より自己の意識化を促すことになると考える。このように、集団における自己の意識が育つことで、その時々には生起する様々な欲求も、周りの期待に応えよう、よりよく生きようとするより高次の欲求へと転換でき、状況に応じたかわりが展開できるようになると考える。

以上、自我関与、自己の意識化といったことで述べてきたが、この自我関与と自己の意識化とは、互いに密接な関連をもつものであり、自己の意識化が促されることで、自我関与が高まったり、自我関与が高まることで自己の意識化が促されたりするものであると考える。また、自己の意識化、自我関与の促進といったものが、自分自身を表現したり、積極的にかかわったり、状況に即した欲求の調整を可能にすると考えることから、自我関与の促進や自己の意識化と自我の発達とを同義にとらえ、その自我の発達がかわり合いの豊かな子供を育てると考える。

この自我の発達を促し「かわり合いの豊かな子供」を育てていくためには、「かわり合いの豊かな教師」の存在がベースとなることを最後に付け加えておきたい。「かわり合いの豊かな教師」とは、教師としての使命感・自覚を持ち、子供との共感的理解に基づく、適切な援助関係が持てる教師であり、教師が子供にどのようにかわっていくか、また、どのような教育的援助を行っていくかが、自我の発達を促す意味において重要な位置を占めると考える。

自己の意識化、自我関与といった、自我の発達を促すことは、対人関係や集団参加の力を伸ばしていくこととなるとともに、子供への学習への適切な動機を与え、学ぶことの楽しさや成就感を体得し、自ら学ぶ意欲・主体的に取り組む態度を育て、ひいては、生涯を通して学び続ける人間の育成へと発展していくと考えられる。言い換えれば、自己の意識化や自我関与の促進が、豊かな心や自己教育力の育成といった改訂のねらいの根底をなすものであり、自己の意識化や自我関与が促進されてこそ、改訂のねらいも実現されていくと考える。

これまで述べてきた、「かかわり合いを豊かにするために」のわたしたちの考えをまとめると、下の図のようになる。

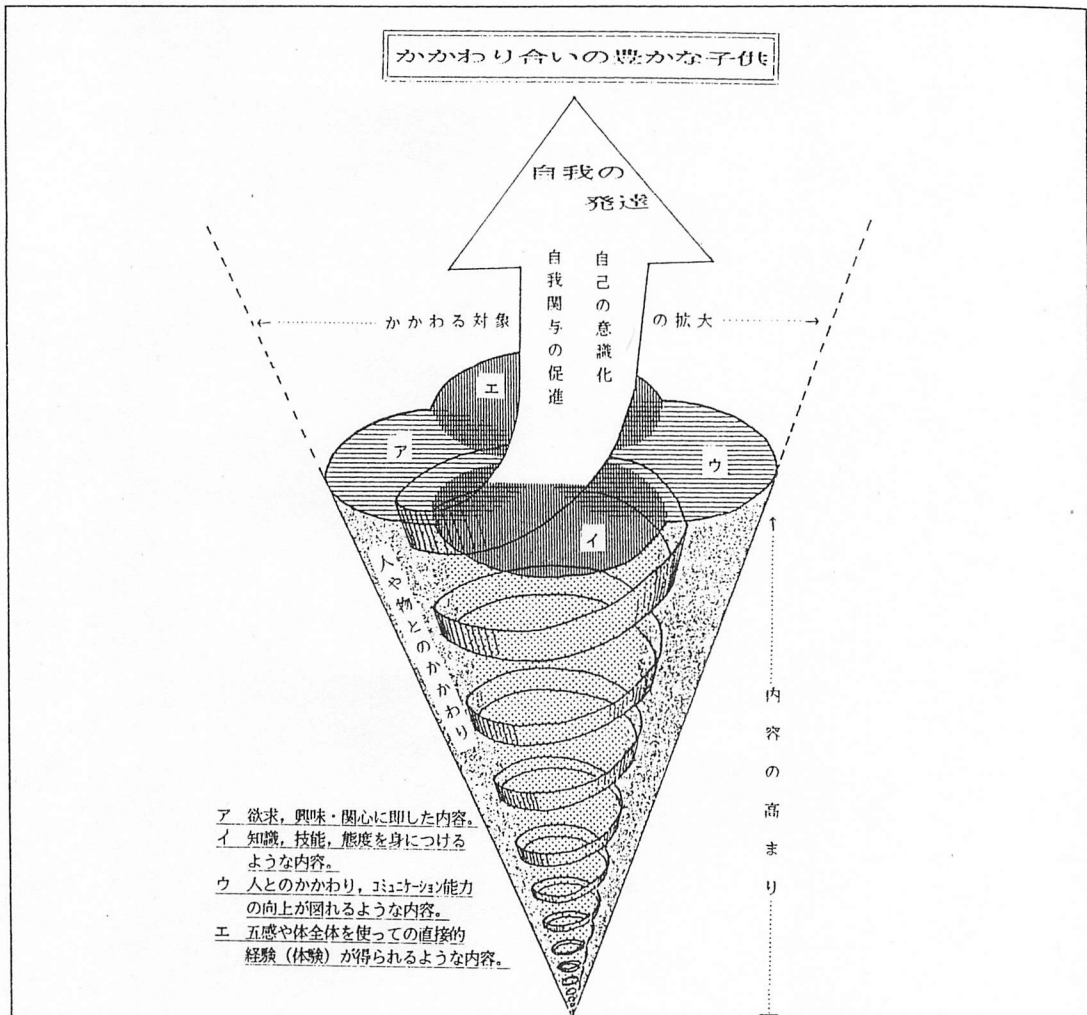


図3 かかわり合いを豊かにするために

- ・ 自我の発達（自我関与の促進，自己の意識化）は，ア，イ，ウ，エ，の4つの円すいの内容を体得していく中で，また，人や物とかかわりを通して，満足感や成就感，自己実現の喜びを味わい次第に（螺旋的に）発達していく。その自我の発達の度合いを線の幅で表わしている。
- ・ ア，イ，ウ，エ，の内容を体得していく過程においては，常に人や物とかかわりがあり，その人や物とかかわりにおいて，自我の発達が促されるとともに，自我の発達に伴い人や物とかかわる対象も拡大していく。
- ・ 自我の発達の低い段階では，かかわる対象も狭く，内容も人や物とかかわる基本的な内容が中心である。

## 5 教育課程編成の実際

### (1) 教育課程編成の留意点

教育課程を編成するに当たっては、今回の改訂の趣旨を踏まえていかなければならない。

わたしたちの「かかわり合いの豊かな子供を育てる」という研究は、これまで述べてきたように、今回の改訂のねらいと目指す方向が一つであるということから、わたしたちは、研究の視点から教育課程編成の留意点を導き出すことにした。また、実際の編成に当たっては、次に示す留意点を考慮していくとともに、編成の基準である学習指導要領に添って編成を行っていた。

#### 《教育課程編成の留意点》

－自我関与及び、自己の意識化を促すために－

- 子供の欲求体系や心身の発達段階、興味・関心に基づいた内容や、欲求体系や発達段階に基づき興味・関心を広げられるような内容を考慮していく。
- 子供にとって最小限必要な、知識、技能、態度を身に付けるような内容を考慮していく。
- 五感や体全体を使っの直接的経験（体験）や自分を表現できるような体験の場が得られるような内容、方法を考慮していく。
- 一人一人の子供が、満足感、成就感を体得できるような内容、方法を考慮していくとともに、個に応じた指導の充実を得るために、学習形態等を工夫していく。
- 人とかかわり合いが図れるような内容や方法を考慮していくとともに、身振り・ことばといったコミュニケーション能力の向上が図れるように考慮していく。
  - ・初期の段階においては、教師や友達同士とのやりとりを通して共有関係が深められるようにしていく。
  - ・集団の中における、自分の立場や役割に気付くような内容、方法を考慮していく。
  - ・学級、学部、学校、地域社会といった、様々な人とかかわりが図れるようにしていく。

### (2) 指導内容の選択・組織

指導内容を選択・組織するに当たっては、学習指導要領解説書に示されている各教科の具体的内容等を参考としながら、各教科、道徳、特別活動及び養護・訓練の内容を具体化し、指導内容を選択・組織していかなければならない。また、指導内容の選択に当たっては、児童生徒の心身の障害や状態及び発達段階や特性並びに地域や学校の実態を考慮して、具体的な指導内容を選択し、適切に配置しなければならない。

ところで、わたしたちは、自我の発達を促すことで「かかわり合いの豊かな子供が育つ」と考え研究を進めており、編成の留意点として、子供の欲求体系や心身の発達段階、興味・関心

に基づいた内容や興味・関心を広げられるような内容を準備する、子供にとって最小限必要な、知識、技能、態度を身に付けるような内容を準備することなどを挙げている。そこで、特に発達段階を自我の発達段階、特性等を欲求、興味・関心という観点から深く掘り下げ、主な指導内容の選択に当たり、子供の欲求体系や発達段階、興味・関心に即した内容を検討していった。

まず、自我の発達段階を5段階に分け、それぞれの段階における、欲求、興味・関心を文献を参考に拾い出し、それぞれの段階における、子供の欲求、興味・関心等を明らかにしていった。この自我の発達段階を5段階に分けるに当たっては、伊藤隆二・田川元康（1966）の「精神薄弱児の自我に関する臨床教育心理学的研究」における「Ego Process」を参考にした。（26ページの「資料」参照）

次に、「かかわり合い」という研究の視点から、かかわりの広がりや「自分自身に関すること」「身の周りの人や物に関すること」「集団でのかかわりに関すること」「社会とのかかわりに関すること」の4つに分けるとともに、自我の発達、欲求、興味・関心から考えられる活動や内容、必要とされる活動や内容を選択していった。

この、自我の成熟段階における欲求、興味・関心に基づいた内容等を、かかわる対象の広がりとの関連からまとめたものが、次の表8「自我、欲求、興味・関心の発達から考えられる主な活動・内容」である。

各学部の児童生徒の自我の発達段階を調べてみると、小学部ではⅠ～Ⅲ段階、中学部ではⅢ～Ⅳ段階、高等部ではⅣ～Ⅴ段階の者が多く位置することがいえる。したがって、小学部では、Ⅰ～Ⅲ段階における内容を中心に、中学部ではⅢ～Ⅳ段階、高等部ではⅣ～Ⅴ段階の内容を中心に据えていくこととした。また、かかわりの広がりから、小学部では「自分自身に関すること」や「身の周りの人や物とのかかわりに関すること」を中心に置き、中学部では、「集団でのかかわりに関すること」を中心としながらも、「身の周りの人や物とのかかわりに関すること」の内容も考慮していく。高等部においては、「集団でのかかわりに関すること」「社会とのかかわりに関すること」を中心に置き、小学部、中学部、高等部の12年間の一貫教育の立場で指導内容を検討していった。

この表8「自我、欲求、興味・関心の発達から考えられる主な活動・内容」を基に、学部教育目標や具体目標との関連を図りながら、各学部の主な指導内容としてまとめたものが、表9「主な指導内容一覧表」である。

表8 自我,欲求,興味・関心の発達から考えられる主な活動・内容

自我の 成熟過程	自 我 , 欲 求	興 味 ・ 関 心	予 想 さ れ る 活 動 ・ 内 容			
			個 人 生 活	家 庭 生 活 ・ 学 校 生 活		社 会 生 活
			自分自身に関する事	身のまわりの人や物とのかわりに関すること	集団でのかわりに関すること	社会とのかわりに関すること
I 基本的欲求が強く、個人の動きに強烈に影響を与えている段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食べ物を求めるなどの生理的欲求が顕著</li> <li>・身体感覚器官の成長</li> <li>・愛情欲求に基づいた、基本的な信頼感を求める</li> <li>・欲求阻止に伴う情報的爆発が強烈</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感覚・知覚・運動の興味</li> <li>・身近な人への興味</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生理的欲求を充足するような活動（生活リズムの確立等）</li> <li>・感覚運動的内容（視覚、聴覚等に直接はたらきかける内容など）</li> <li>・情緒の安定を図るような活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供との信頼関係を育てるような活動</li> </ul>		
II 社会的自我の発展への内的衝動の萌芽が認められる段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体操作性と発達</li> <li>・試みの失敗による羞恥感・自律性の形成</li> <li>・身辺自立の芽生え</li> <li>・身近な人への依存</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体操作</li> <li>・身のまわりのおとなや子供への興味</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・からだ全体を使っている活動</li> <li>・基本的な生活習慣を身に付けるような内容</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師や友達と一緒に遊べるような内容</li> <li>・まわりの人と意図や気持ちを共感できるような内容</li> </ul>		
III 自分と他者を区別し、社会的承認を求め、集団生活への参加を求める段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目、手、耳などを使って具体的に事物を把握</li> <li>・自己中心的な行動・反抗のあらわれ</li> <li>・表象機能の芽生えと自由な表現</li> <li>・他人の特徴（能力や性格）の把握と模倣</li> <li>・身近な人への自我同一化・役割の意識化とその模倣</li> <li>・内的なルールや約束</li> <li>・他人から承認されたという欲求の増大</li> <li>・欲求が満足される範囲内での年下の子供の世話</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水・土・砂など身近な自然物や玩具への興味</li> <li>・ことばへの興味</li> <li>・想像することへの興味</li> <li>・生活（衣・食・住）への興味</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・手指の運動、創造性を引き出すような内容</li> <li>・言葉を使った自己表現への意欲を喚起するような内容</li> <li>・自由な発想を生かして展開できるような内容（可塑性に富んだ素材、自由な選択、子供主導の活動、本物に触れ、感動をゆさぶるような活動）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由な雰囲気の中で、簡単な役割やルールを含んだ活動</li> </ul>	
IV 自己中心性から脱却し社会的承認を求める心が強く、自己客観視が芽生えてくる段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康の保持・活動欲求</li> <li>・集団への参加欲求</li> <li>・社会的意識の芽生え（役割関係）</li> <li>・競争心が芽生える（優越感）</li> <li>・リーダーシップやフォロアシップの芽生え</li> <li>・自己顕示欲の増幅（目立ちたがる）</li> <li>・人格的対人認識の始まり（自他の関係から他関係へ）</li> <li>・自他の比較の芽生え（優越感・劣等感）</li> <li>・性への芽生え</li> <li>・大人への対抗心・手伝いの意識化</li> <li>・自己顕示欲増大</li> <li>・公正という意義の芽生え</li> <li>・目的意識の芽生え</li> <li>・初歩的な社会の仕組みの理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・粗大な遊びへの興味</li> <li>・身近な道具や道具への興味</li> <li>・時間的なものへの興味</li> <li>・集団活動への興味</li> <li>・集団による遊びや、集団対抗のスポーツ遊び</li> <li>・ルールのある遊び</li> <li>・知識を得るための興味</li> <li>・家庭（日常）生活への興味</li> <li>・対人関係への興味</li> <li>・仕事することへの興味</li> <li>・知識・技能を得ることへの興味</li> <li>・自己表現や伝達に関する興味</li> <li>・仕事することへの興味</li> <li>・身近な公共施設や機関の利用への興味・関心</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康、衛生に関する内容</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・粗大な動きを必要とするような内容</li> <li>・簡単な道具や器具の取り扱い</li> <li>・事物への主体的なかわりを促すような内容</li> <li>・家庭内の役割活動（手伝い）</li> <li>・家庭生活に必要な知識、技能を身に付けるような内容</li> <li>・構成的な活動（工作的な活動）</li> <li>・動植物に触れ合う内容</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・係活動や委員会活動といった場での役割意識を高めるような内容</li> <li>・友達同士のかかわりを促すような内容</li> <li>・冒険やスリルのある遊び</li> <li>・問題解決力を高めるような内容</li> <li>・異年齢集団での活動</li> <li>・集団の中でいろいろな手段を使って自己表現できるような内容</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・働くことに関する基礎的内容</li> <li>・地域社会とのかわりが図れるような内容</li> </ul>
V 自己客観視が確立し、自己実現への内的衝動の萌芽がみられる段階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康の維持、コントロール（食欲・睡眠・休息・排泄）</li> <li>・挑戦心、冒険心の高まり</li> <li>・仲間意識の高まり（責任感、協調性、競争心など）</li> <li>・友情の深まりから愛情、恋愛への芽生え</li> <li>・自己意識の高まり（容姿、服装、能力、性格、羞恥心）</li> <li>・リーダーシップの発達</li> <li>・反抗期の出現</li> <li>・正義感の芽生え</li> <li>・自己の主体的価値判断に基づく道徳の芽生え</li> <li>・自分の将来の生活への意識化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的倫理的興味</li> <li>・身体運動への興味</li> <li>・地域社会への興味</li> <li>・仕事への興味</li> <li>・芸術、文化への興味（趣味、余暇）</li> <li>・道徳価値への興味（奉仕、いたわり、ゆずり合い）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身の生き方を考える内容</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健全な異性観を育てる内容</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集団の中で、リーダーとしての自己の役割意識を高めるような内容</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・働くことに関する内容（意欲・態度）</li> <li>・地域社会とのかわりが高められる内容</li> <li>・社会的承認が得られるような内容</li> <li>・社会の中で果たすべき自己の役割を意識できるような内容</li> <li>・社会の仕組みや出来事に関する内容</li> </ul>

表 9 主な指導内容一覧表

	小 学 部	中 学 部	高 等 部
1 基本的な生活習慣に必要な知識・技能・態度を高めるような内容。 (自分自身に関する内容)	<p>①生活の基本動作に必要な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・衣服の着脱</li> <li>・食事</li> <li>・排泄</li> <li>・整理・整頓</li> </ul> <p>②健康や安全に関する内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体力づくり</li> <li>・身体の清潔(うがい、手洗い、歯磨き、性に関することなど)</li> <li>・安全な登下校</li> <li>・道具や用具の安全な使い方</li> <li>・避難の仕方</li> </ul>	<p>①生活の基本動作に必要な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・着脱、排泄、食事</li> <li>・整理・整頓等</li> </ul> <p>②健康や安全に関する内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生理の処理、性に関すること</li> <li>・身の清潔、病気、けが、病院の利用等</li> <li>・衣服の調節等</li> </ul>	<p>①生活の基本動作に必要な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・衣服の着脱や整理・整頓</li> <li>・食事マナー</li> <li>・トイレの使い方</li> </ul> <p>②健康や安全に関する内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・性の指導に関すること(性指導、男女の交際、結婚)</li> <li>・体力、気力づくり</li> <li>・健康管理</li> <li>・交通安全</li> <li>・生活のリズム</li> </ul>
2 身の周りの人や物とのかわり合いを促すような内容	<p>①遊び的な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・情緒面を満たすような内容</li> <li>・自由な自己表現ができるような内容</li> <li>・簡単な道具を使ったり作ったりするような内容</li> </ul> <p>②身近な人との対応に関する内容</p> <p>③身近な自然とのふれあいを深めるような内容</p> <p>④本物に触れるような内容(生の演奏、人形劇など)</p>	<p>①いろいろな事物へ主体的にかかわることができるような内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・身体運動を取り入れた内容</li> <li>・つくる活動を取り入れた内容</li> <li>・自然とのふれあいを深めるような内容</li> <li>・生の作品に触れるような内容</li> </ul> <p>②家庭生活に必要な知識・技能・態度を身に付けるような内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・身近な器具・道具の使い方に関する内容(掃除機、洗濯機、アイロン、雑巾、ふき、ぬぐい、拭き、ぞいの仕方)</li> <li>・安全に関する内容(交通ルール、登下校に関する、危険場所等)</li> <li>・あいさつ、応対に関する内容</li> </ul> <p>③家庭や学校の近隣とのかわり合いを広げるような内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・近隣の施設の利用を促すような内容(商店や公園、郵便局等の利用に関する内容)</li> </ul>	<p>①家庭生活の技術に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単な電気製品や道具の使用</li> <li>・簡単な調理</li> <li>・買物の仕方</li> </ul> <p>②家庭や学校の近隣とのかわり合いに関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつ、言葉遣い</li> <li>・近隣の施設の利用に関すること</li> </ul> <p>③芸術や自然とのふれあいに関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生の作品とのふれあい</li> <li>・余暇の利用</li> <li>・創造性を養う活動</li> </ul>
3 集団でのかわり合いを促すような内容	<p>①簡単な役割を果たすような内容(きまり、係の仕事、手伝いなど)</p> <p>②友達同士のかわり合いを促すような内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・異年齢集団での活動</li> <li>・交流学習</li> </ul>	<p>①役割意識を高めるような内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教室での係活動や行事での係に関する内容</li> <li>・共同活動を取り入れた内容</li> </ul> <p>②自己表現力を高めるような内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発表の内容を多く取り入れた内容(感じたことを絵にかいたり文にしたり、動作化したり話したりすること)</li> </ul> <p>③友達同士のかわり合いを促すような内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・異年齢集団を取り入れた活動</li> <li>・交流学習での活動</li> </ul>	<p>①役割意識の向上に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学級の係や行事での係</li> </ul> <p>②自己表現の向上に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発表活動</li> <li>・表現活動</li> </ul> <p>③友達同士のかわり合いに関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・集団で行うスポーツや遊び</li> <li>・クラブ活動や生徒会活動、学校行事など、異年齢集団による活動</li> <li>・交流教育</li> </ul>
4 社会生活へのかわり合いを促すような内容	<p>①公共施設・交通機関の利用に関する内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・図書館、動物園などの利用</li> <li>・交通機関への関心を高めたり、利用の仕方に関する初歩的な内容</li> </ul> <p>②家族の役割や近所の様子に関心を持つような内容</p> <p>③日常生活に必要な言語や数量に関する内容</p>	<p>①働く喜び、働く意欲・態度等に関する内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事の役割分担</li> <li>・仕事に必要な道具や器具の取り扱いに関する内容</li> <li>・販売活動、貯金</li> <li>・社会のしくみ</li> </ul> <p>②公共施設・機関の利用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・交通機関の利用に関する内容</li> <li>・博物館、美術館の利用に関する内容</li> <li>・官公署の機能の理解を深める内容</li> </ul> <p>③地域住民とのかわり合いを広げるような内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校行事への呼びかけに関する内容</li> <li>・奉仕的活動を取り入れた内容</li> </ul> <p>④言語・数量に関する内容</p>	<p>①動方にかかわる体験的学習に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・働く意義や態度及び技能</li> </ul> <p>②実生活と結びついた公共施設や交通機関に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・施設の機能の理解(掲示や標識)</li> <li>・施設や交通機関の活用</li> </ul> <p>③地域社会との交流に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・奉仕活動</li> <li>・訪問活動</li> </ul> <p>④言語・数量に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・書類等への記入</li> <li>・受付での対応</li> <li>・電話での対応</li> <li>・時刻の読み</li> <li>・表の見方</li> <li>・計算</li> </ul> <p>⑤社会のしくみや出来事に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会の事象(政治・経済)</li> <li>・世界の出来事</li> </ul>

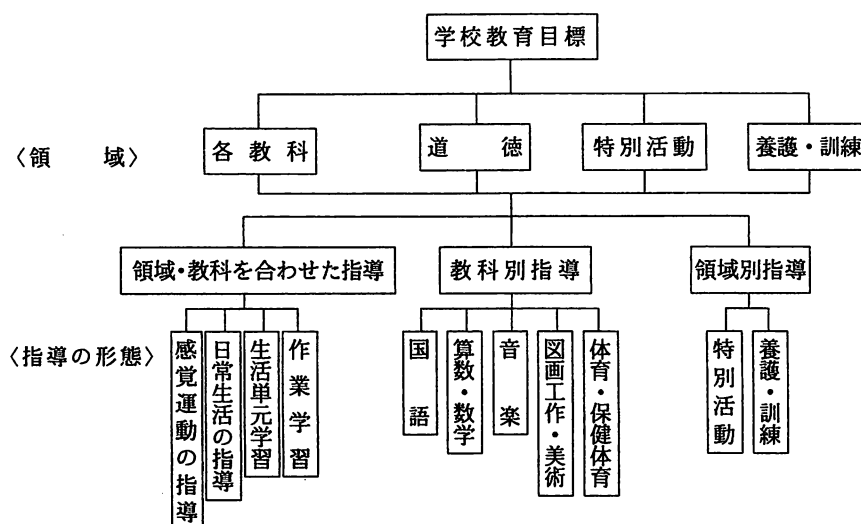
I 基本的欲求が強く、個人の動きに強烈に影響を与えている段階	II 社会的自我の発展への内的衝動の萌芽が認められる段階	III 自分と他者を区別し、社会的承認を求め、集団生活への参加を求める段階
<p>A. 食物を求めるなどの基本的欲求のみがいたずらに強く、したがって関心は、それが充足されることに指向している。</p> <p>B. 基本的欲求の対象以外の関心は、浅く狭く、一人うつろな目でボンヤリしている（あるいは爪をかんだり、指を口にくわえたりしている）。しかし、だれかがオドケたまねやオドシタリすると身体運動を伴って反応する。</p> <p>C. 欲求が充たされさえすれば機嫌がよく欲求阻止され関心が拘束されると、情緒的爆発は強烈で、泣き叫んだり手足をバタつかせたりする。</p> <p>D. 競争意識はまだ芽生えていないし、羞恥心もない（はだかでききまわっても、また用便のとき便所の扉が開いていても意に介さない。洋服が裏返しになっというように、顔が汚れていようと平気である）。</p>	<p>A. 関心の領域は、食物などから少しずつ広がり、珍しい物には手を出したが、自分の所有物を奪われると取り返そうとする意識が出てくる。</p> <p>B. 他の子どもが遊んでいるのに少し関心の目を向け、時には模倣しようとしている。ただ、その模倣は形式的である（内容ではなく格好だけを機械的にまねる）。</p> <p>C. 情緒の爆発はなお強烈で、またすぐ変転する。ただ、情緒の表出はやや技巧的になる（例えば怒ったり泣いたりする場合、周囲の人々の反応を求めてぶったり、大げさに倒れて手足をバタバタやったりする）。</p> <p>D. 羞恥意識もおぼろげながらあらわれる。例えば、はだかで飛び回ること（それを周囲の人がワイワ騒ぎ立てること）は、なんとなくおかしいことだと意識する。</p>	<p>A. 関心の範囲はさらに広がり、他の子どもや大人にも及んでいく。</p> <p>B. 単なる形式的機械的模倣から、役割として模倣しようとする意識がみられる。（例えばゴッコ遊び）</p> <p>C. 自分の欲求が満足される範囲内で、友だちを手伝ってやりたり世話をやいたりする。</p> <p>D. 自分のしたいことを主張し（時には我を張り）、自分の力を機会をとらえて試そうとする。それが障壁にぶつくと、激しいケンカとなってあらわれる。</p> <p>E. 自分が他者との関係でどのように存在しているかがおぼろげながらもわかってくる。特に能力の弱い者を負かして一人悦に入っていたり、だれか見ているとますます虚勢をはり、珍しいものなどを見せびらかす。</p> <p>F. 人が見ている（干渉する）と、わざとふざけたり、気むずかたりする（だれもいないところでおとなしいのに）。</p>

<p>IV</p> <p>自己中心性から脱却し、社会的承認を求める心が強く、自己客観的が芽生えてくる段階</p>	<p>V</p> <p>自己客観視が確立し、自己実現の展開への内的衝動の萌芽がみられる段階</p>
<p>A. 周囲の人々の役割を知り、単なる役割の模倣ではなく役割を分担しようとする意識がみえてくる。</p> <p>B. 自分より力の劣っている者が困っていると慰めたり、喜ばそうとして世話をやく。</p> <p>C. 集団（仲間）からのけものにされまいとし、集団からの承認を得ようとする。</p> <p>D. 他者の行動の邪魔にならないように心がけられ、また積極的に協力しようとする。</p> <p>E. 自分と同程度の力のあるものを相手に争おうとする意識がでてくる（能力差がありすぎる場合には相手にしなくなる）。</p> <p>F. 自分のほうがすぐれていることによって優越意識を、また負かされることにより、劣等意識をもつようになる。</p> <p>G. 教師や親から自分が特別にめんどろをかけられていることを知るとうれしがり（大勢の人の前ではとくに）、逆に自分以外のひと（とくに競争相手）がチャホヤされていることを知ると嫉妬する。</p> <p>H. 本当は欲しい（してもらいたい）のだがすねることがある（これは相手をためすという下心からあらわれていることが多い）。</p>	<p>A. 集団の中での役割の責任をまっとうすること（そのことが自他ともに承認されていることがいうまでもなく必要である）、がさらに重要な役割（高い地位）を得ることを目指す姿勢がとれている。</p> <p>B. 自分は不利でも、または自己を犠牲にしても他の人が困っていると援助しようという意識が芽生える。</p> <p>C. 他者の目を極度に意識し、自分の容姿、服装、姿勢、身振り、歩行、声、知能などを気にする。（自分が他者にどう思われているかを非常に気にする）。</p> <p>D. 人前で情緒をむき出しにすることは恥ずかしいことだ、という意識がでてくる（例えば人目を避けて忍び泣くとか、怒りをいったん胸の中におさめるなど）。</p> <p>E. 他者との競争心によって啓発された意欲は、自己との闘いという形に転化する。すなわち、作業など昨日の自分の成果よりも今日より多くやろうとか、質的によりよいものを作ろうという努力に変わる。また「あるべき自分の姿」を心に描いて、少しでもそこへ近づこうという気持ちがでる。</p> <p>F. 自分の能力のなさ努力の不足に対して怒ったり（単に所有物が奪われたなどが原因でなく）また、自分が軽蔑されたとか、相手が約束を守らなかった（弱い者をいじめた）などの理由からけんかをする。</p> <p>G. 心の中で別の状態を立てて策略する（人をだますなど）ことも、将来の自分のあり方を指向することもでき、自我は時間的空間的に拡大し深くなる。</p>



## 6 本校の教育課程の構造

### (1) 本校の教育課程の全体構造



#### ① 感覚運動の指導

感覚運動は、環境から情報を受け入れ、処理し、行動として発現する過程であり、これは、日常の身辺処理や教科学習などのあらゆる活動の基盤となる能力を養う指導の形態としてとらえている。指導に当たっては、子供の発達に応じて感覚入力段階、粗大運動段階、知覚・運動段階の3段階に分け、一人一人の課題に即した内容を取り入れている。

○ 小学部で領域・教科を合わせた指導として位置付けて、20分を1単位時間として週4回実施。

#### ② 日常生活の指導

日常生活の指導とは、日常生活に必要な内容を1日の生活の流れに沿って指導し、子供の生活をより充実にしたものにしていくものであるととらえている。

○ 小学部では1校時及び下校前に日常生活の指導として、帯状に設けている。中学部・高等部では、特に時数としてはカウントせず、一日の生活の流れに沿って指導を行う。

#### ③ 生活単元学習

生活単元学習は、身近な生活場面から発展したものを取り上げ、興味をもって意欲的に学習させることを通して、身近生活の処理能力や集団生活、社会生活への参加の仕方などの現在及び将来の生活を高めようとするものである。

○ 小学部・中学部・高等部とも、領域・教科を合わせた指導として位置付けている。

#### ④ 作業学習

作業学習とは、職業生活及び家庭生活に必要な知識、技能と勤労を重んずる態度を養うとともに進んで社会生活に参加していく能力を培うことを意図し、作業活動を中心とする実際的な経験を通して、自主的生活に必要な事柄を学習させようとする指導の形態である。

○ 中学部、高等部において、領域・教科を合わせた指導として位置付けている。

#### ⑤ 教科別学習

各教科の内容は、領域・教科を合わせた指導で総合的に扱われることが多いが、子供の発達の可能性を更に伸ばし、また、社会自立をより確かにする上で、領域・教科を合わせた指導から特別に抜き出して反復練習させたり系統的指導を行っていくことが大切である。本校では、国語、算数・数学、音楽、図画工作・美術、体育・保健体育などの教科独自のまとまりをもつ内容として組織し、指導していこうとするものである。

○ 小学部では、3年生より算数を導入。3年生以上の国語・算数は、中・高学年を合わせた能力別による指導を行う。

○ 中学部では、国語・数学は能力別による指導を行う。運動の生活化、体力向上を目指し、帯び時間の「運動の時間」を設ける。

○ 高等部では、国語・数学は能力別による指導を行う。

#### ⑥ 特別活動

特別活動とは、望ましい集団による実際活動を通して、心身の調和のとれた発達を図るとともに、仲間意識や自主的、実践的な態度を育て、よりよい生活を営むうえに必要な基礎的資質を養うための指導の形態である。

○ クラブ活動・委員会活動を設け、小学部高学年より参加。

○ 全校児童生徒の縦割りの異年齢集団活動として、「なかまの時間」を設ける。

#### ⑦ 養護・訓練

子供たちは、単に知的な発達の遅れだけでなく、言語、感覚、知覚、運動、情緒、行動などにおける何らかの様々な発達上の障害を併せもっている。このような児童生徒の心身の障害の状態を改善、克服するために必要な知識や技能、態度を及び習慣を養うための指導の形態である。

○ 個人を対象に、養護・訓練の時間における指導を行う。

#### ⑧ 道徳

子供たちが、社会生活をよりよく営んでいくためには、人間として望ましい行動の仕方、豊かな心情、道徳的な判断力などを身に付けさせる必要がある。このように、一人一人が自己を高め、社会人として必要な道徳性を培う内容のまとまりを道徳の領域としてとらえている。

○ 日常生活の指導、生活単元学習などの全教育活動の中で配慮して扱うようにする。

## (2) 学部（学年）別教科等配当時数

教科等 学部（年）		領域・教科を合わせた指導				教科別の指導					特別活動	合計
		日常生活の指導	感覚運動の指導	生活単元学習	作業学習	国語	算数数学	音楽	図工美術	体育保健		
小学部	低学年	6	2	8	0	2	0	2	2	3	0	25
	中学年	6	2	8	0	2	2	2	2	3	0	27
	高学年	6	2	8	0	2	2	2	2	3	2	29
中学部		0	0	9	7	2	2	2	2	4	3	31
高等部		0	0	6	12	2	2	2	2	2	3	31

## (3) 学校行事及び学部関係の行事

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学校行事	始業式 新任式 入学式 身体測定 交通安全教室 耳鼻科検診 一日遠足 仲良し作業	小運動会 いびの検診 避難訓練 眼科検診 歯科検診 内科検診 修学旅行 〈中・高等部、隔年〉	読書感想発表会 健康診断 整形外科検診 現場実習壮行会	終業式	始業式 身体測定 健康診断 大運動会 仲良し作業	眼科検診 避難訓練 一日遠足	修学旅行 〈小学部、隔年〉 現場実習壮行会	終業式 演劇鑑賞会 歯科検診 耳鼻科検診 附養まつり	始業式 身体測定 健康診断 持久走大会 避難訓練	立志式 学習発表会	卒業式 修了式 お別れ遠足 仲良し作業
学部関係の行事	新入生歓迎会 家庭訪問 お楽しみ給食会		学校保健委員会 交流教育		実習生歓迎会 実習生お別れ会	実習生歓迎会 実習生お別れ会 交流教育	交流教育	入学選考			学校保健委員会 お別れ給食会 辞任式
小学部		乗り物の見学 お祭り大会	いも植え 校内宿泊	七夕子供会 海に行こう 水遊び大会	十五夜子供会	いもほり 校外宿泊	秋の野山観察 大学祭見学	お祭り大会 クリスマス会	新年子ども会	筋子子ども会 図書館見学	お祭り子供会 お別れ会 木市見学
中学部		交通機関の利用	校内宿泊	校外宿泊			現場実習 校内実習	暮れのお祭り もちつき大会 クリスマス会	結びらき 書き初め会		
高等部	木市見学	校内宿泊 校内実習	現場実習	臨海宿泊			現場実習 校内実習	買物学習	結びらき お祭り大会	施設訪問	

## (4) 児童生徒生活時程

平 日

8:40～ 8:50	委員会活動
8:55～ 9:05	朝の会
9:10～ 9:50	1校時
9:55～10:35	2校時
10:45～11:25	3校時
11:30～12:10	4校時
12:10～13:15	給食・昼休み
13:25～13:40	清掃作業
13:45～14:25	5校時
14:30～15:10	6校時
15:10～15:35	更衣・帰りの会
15:35	下校

土曜日

8:40～ 8:50	学部朝会
8:50～ 9:00	朝の会
9:00～ 9:40	1校時
9:45～10:25	2校時
10:40～11:20	3校時
11:20～11:40	更衣・帰りの会
11:40	下校
ただし、水曜日の午後	
13:15～13:40	更衣・帰りの会
13:40	下校

(5) 週時間割

① 小学部 1組 (低学年)

	月	火	水	木	金	土	
1	なかま	日常生活の指導					
		感覚運動の指導					
2	音楽	国語	体育			国語	
3	図画	生活単元学習					音楽
4	工作						
5	日常生活	の指導					

② 小学部 2組 (中学年)

	月	火	水	木	金	土	
1	なかま	日常生活の指導					
		感覚運動の指導					
2	音楽	国語	体育			国語	
3	図画工作	生活単元学習					音楽
4							
5	日生	算数		算数	日生		
6		日生		日生			

③ 小学部 3組 (高学年)

	月	火	水	木	金	土	
1	なかま	日常生活の指導					
		感覚運動の指導					
2	音楽	国語	体育			国語	
3	図画工作	生活単元学習					音楽
4							
5	クラブ活動	算数		算数	学級活動		
6	日生			日生			

④ 中学部

	月	火	水	木	金	土
1	なかま	運動の時間				作業学習
2		生活単元学習				
3	作業学習	数学	作業学習		国語	数学
4		国語			国語	数学
5	活クラブ 動	体育保健		美術	体育保健	
6	音楽	活学 動級		美術	音楽	

⑤ 高等部

	月	火	水	木	金	土
1	な か ま	生活単元学習				
2	生活単元学習	国語	音楽	体育保健	美術	数学
3	音楽	美術	体育保健	数学	音楽	体育保健
4	体育保健	美術	音楽	作業学習	美術	音楽
5	クラブ活動	作業学習	国語	作業学習	作業学習	作業学習
6	ホームルーム	作業学習		作業学習	作業学習	作業学習

## Ⅱ かかわり合いの豊かな子供を育てる生活単元学習

### 1 はじめに

わたしたちは、「かかわり合いの豊かな子供を育てる教育課程の編成」に当たり、教育課程編成の基本的な考え、本校の教育課程の構造等をまとめ、次に指導計画の作成に取り組んだ。まず、平成2年度から、平成3年度にかけて、精神薄弱養護学校における中核的指導の形態である「領域・教科を合わせた指導」の指導計画作成に取り組むこととした。その中でも、領域・教科を合わせた指導の代表的な形態であり、教科等との関連の大きい「生活単元学習」の指導計画作成に当たった。

その際、「単元について」研究の視点からの検討を加え、単元の意義・価値等をまとめ、それぞれの単元についての共通理解を図り、指導計画に明記していった。また、これまで単元の目標が行動そのもので表されていた面を、今回の研究が子供たちの内面に目を向けようとしていることから、意欲面や態度面といった目標の表記へと改善していき、さらに、今回の改訂が道德教育の充実を目指していることから、関連内容に道德を挿入していくことで、本校の道德教育の充実を図ってきた。

このように、指導計画を作成し、その実践を展開していく中で、生活単元学習の指導内容を見直すとともに、指導方法を深め「かかわり合いの豊かな子供を育てる生活単元学習はどうあればよいか。」ということを探ってきた。

### 2 生活単元学習の指導計画作成の立場

#### (1) 生活単元学習の基本的な考え

精神発達遅滞児は、精神構造が未分化なため教科のように分化された知識、技能をたとえ習得させ得たとしても、それだけではある課題場面に直面したときに、教科別に習得した教育内容を総合し応用して、その課題を解決することが困難なことが多い。つまり、教育内容を細かく教科別に分けての指導だけでは、知識、技能が断片的にとどまり、それが生活に役立つ知識・技能として習得するまで高まっていけない。そこで、未分化なかたちで具体的な生活に即した方法で、つまり、全部または一部の教科の内容を合わせたり領域の内容を統合したりして指導し、生活に役立つ生きた知識、技能、態度を身に付けさせる必要がある。そのような方法の一つとして、生活単元学習とよばれている指導の形態がある。

生活単元学習は、生活上の課題処理や問題解決のための一連の目的活動を組織的に経験させることによって、現在及び将来の自立的な生活に必要な事柄を実際的、総合的に学習させようとするものである。

したがって、生活単元学習では、子供が自分の生活を基盤にして環境に積極的に働きかけることにより、生活経験の範囲を広げ、自発的、自主的行動ができるように行動の質的変容を目指すとともに生活力の育成を図っていくとするものである。

そこで、このような意義を達成するために必要な条件として次のものを設定する。

- ・ 実際の生活から発展した内容であり、子供の興味に基づいたものであること。また、子供の興味・関心を喚起し、強めるものであること。
- ・ 学習活動が終ったとき、子供が満足感、成就感を味わえるものであること。

- ・ 子供が目当てを持って活動できるものであり、目的意識や課題意識の乏しい子供でも繰り返し活動させることによって、見通しが持てるようなものであること。
- ・ 活動の中で役割分担を取り入れられるものであること。
- ・ 豊かな内容を含む活動で組織されており、学習を通していろいろな経験ができるものであること。
- ・ 活動を通して、現在及び将来の社会生活に必要な知識、技能、態度が身に付くように、言語・数量などの知的内容を含むものであること。
- ・ 子供の発達段階に差はあっても、集団として一緒に活動できるものであること。

ところで、「かかわり合いの豊かな子供」を育てるために、本校では、子供の欲求や興味・関心のある活動・内容を準備し、それらを展開していくなかで満足感や成就感といった自己実現の喜びを味わわせ、自我の成熟を促すことが重要であると考えている。

そこで、生活単元学習の指導計画の作成に当たっては本校の子供の生活上の課題や問題（現在、獲得しつつある事柄及び近い将来、身に付けさせたい事柄）を自我の成熟段階や欲求、興味・関心の発達変化等と関連付けながら総合的に検討し、学習内容や活動を設定していくことにする。

具体的には、前文で述べた「自我、欲求、興味・関心から考えられる主な内容・活動」表のそれぞれの自我の成熟段階（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ）における欲求や興味・関心の内容を、子供の生活上の課題や問題と関連付けながら検討し、学習内容・活動を設定していくことにする。その際、小学部、中学部、高等部という12年間の一貫教育の立場から「自分自身に関すること」、「身のまわりの人や物とのかかわりに関すること」、「集団でのかかわりに関すること」、「社会とのかかわりに関すること」といった、かかわり合いの空間的・質的な広がりも検討しながら設定していくことにする。

また、各学部における活動内容の重点の置きどころについては、次のように考える。

自我の成熟段階	自我、欲求・興味・関心	自分自身に関すること	身のまわりの人や物との…	集団でのかかわりに………	社会とのかかわりに………
Ⅰ	略				
Ⅱ	略	小学部			
Ⅲ	略		中学部		
Ⅳ	略			高等部	
Ⅴ	略				

小学部では、社会的自我の発展への内的衝動の萌芽が認められる段階から、社会的承認を求め集団生活への参加を求める段階にある子供が多く、興味・関心は、自分自身や身の周りの人や物に向いていると考えられる。そこで、単元や活動内容を設定していくにあたっては、身の周りの人や物へのかかわりを促し、自分自身の身の周りの生活を充実していくような内容や活動を中心にしながら、集団や社会とのかかわりに関するようなものも取り入れて作成していく。

中学部では、大多数の子供が自己中心性から脱却して社会的な承認を求めるような段階にあ

と思われる。これは基本的欲求を充足するものに向いていた興味・関心が、身近な人々や初歩的な社会事象・事物に興味・関心が向いてきているともいえる。そこで、単元や活動内容を設定していくに当たっては、身の周りの人や物、集団へのかかわりを促すような内容を中心にしながら、社会とのかかわりに関するような内容も盛り込んだ単元構成や活動内容を工夫していく。

高等部では、社会への出口という大切な時期でもあり、自己中心性から脱却し社会的承認を求める心が強く、自己客観視が芽生えてくる段階の子供から、自己客観視が確立し、自己実現への内的衝動の萌芽が認められる段階の子供まで幅広い実態がみられる。これは、身近な人々や初歩的な社会事象・事物に向いていた興味・関心が、将来の生活や自分自身の生き方に興味・関心が向き始めてきているといえる。そこで、単元や活動内容を設定していくに当たっては集団でのかかわりを促す内容や社会とのかかわりを促す内容を中心にしながら、自分自身に関する内容や、身の周りの人や物とのかかわりに関する内容も盛り込んだ単元構成や活動内容を工夫していく。

このように、生活単元学習の指導内容に、子供の生活上の課題や問題を自我の成熟段階や欲求、興味・関心の発達変化等と関連付けながら取り入れていくことは、これまで以上に子供の自己の意識化や自我関与を促進し、先述した生活単元学習の意義を達成するための条件や目標をよりよく満たすことができるようになると思う。さらに、このことが、自我の成熟を促しかかわり合いの豊かな子供を育てることにつながると考える。

## (2) 目 標

- 身の周りの人や物、出来事への興味・関心を広げ、自発的、自主的な生活態度を養う。
- 集団生活への参加の仕方を身に付けさせるとともに、生活に必要な初歩的な知識、技能を身に付けさせ、自主的、自律的な生活態度を養う。
- 社会生活を円滑に行うために必要な基礎的、基本的な知識、技能を身に付けさせるとともに、主体的、自律的な生活態度を養う。

## (3) 指導計画作成上の配慮事項

- ① 児童生徒の生活より発展し、児童生徒の自我の成熟段階や欲求、興味・関心に基づいたもので、課題意識や問題意識がもてるような単元を設定する。
- ② 単元配列に当たっては、児童生徒の生活上の課題や問題及び自我の成熟段階、欲求、興味・関心等を基盤にしながら学校行事や季節等を考慮して内容に偏りがないように配列する。また、児童生徒の先行経験が生かされ意欲的に活動できるようにするために、年間を通してそれぞれの単元に関連をもたせるようにする。
- ③ 単元の目標や指導内容については、小学部、中学部、高等部それぞれの学部間に系統性をもたせるようにし、身の周りの事物・事象→集団生活→社会生活といった広がりや発展性が図れるようにする。
- ④ 学習内容や活動を単元として組織する際は、子供の欲求や興味・関心及び子供の生活としての自然な流れやまとまりに十分配慮するようにする。
- ⑤ 経験を広げ、現実的な認識を深め、また、感動を呼び起こすような体験的な活動を可能な限

り指導内容に位置付ける。

⑥ 単元の活動によって身に付けた興味、関心、技能、態度等が、学校外の生活にも適用され、単元終了後の生活にも生かされるような内容を位置付ける。

⑦ 週当たりの時数は、小学部で8時間、中学部で9時間、高等部で6時間とし、年間35週で算定し、それぞれの単元の内容に応じて時数を配当する。

### 3 各学部での研究

各学部においては、「かわり合いの豊かな子供を育てる生活単元学習はどうあればよいか。」ということで、指導内容・指導方法の研究に取り組んでいった。

まず、教育課程編成の基本的な考えを受け、生活単元学習の指導計画を作成するとともに、かわり合いの豊かな子供を育てるには、学部としてどのような取り組みが必要か、自我の発達を促す今回の研究の視点、学部教育目標、子供たちの実態等との関連を図りながら、今回の研究の視点を明らかに、実践授業を通して授業の分析・評価を行い、指導内容及び指導方法を検討し、指導内容を修正していくとともに、指導方法の研究の深化を図っていった。

なお、各学部の研究の視点は、次のとおりである。

	小 学 部	中 学 部	高 等 部
かわる対象 の拡大	教 師 と 子 供	対教師に併せて対子供 (ここまでは、1対1の 関係を中心に)	教師と子供を含めた集団
研究の視点	<ul style="list-style-type: none"> <li>教材・教具の提示の在り方</li> <li>教師のかかわり方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>テーマ設定及びテーマの構造化</li> <li>物の設定</li> <li>活動相手の設定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>役割意識</li> <li>自己表現</li> </ul>



### 参考・引用文献

- 鹿児島大学教育学部附属養護学校（1986～1990）：研究紀要 第5集～第7集
- 文部省（1991）：特殊教育諸学校小学部・中学部学習指導要領解説－養護学校（精神薄弱教育）編－  
菊川 治・高岡 浩二（1989）：小学校教育課程を読む－総則の解説と展開－ 教育開発研究所
- 成田 國英（1989）：小学校新教育課程を読む－特別活動の解説と展開－ 教育開発研究所
- 依田 新（1983）：新・教育心理学事典 金子書房
- 外林 大作・辻 正三・島津 一夫・能見 義博（1976）：心理学事典 誠信書房
- 津守 真（1984）：自我の芽生え－2～3歳児を育てる－・ 岩波書房
- 高野 清純ほか（1973）：児童心理学講座 6 情緒・欲求・動機，8 人格の発達 金子書房
- 伊藤 隆二（1986）：ちえおくれの子どもの心理と教育 日本文化科学社
- 浜田寿美男（1989）：ワロン／身体・自我・社会 ミネルヴァ書房
- 梶田 叡一（1989）：自己意識の発達心理学 金子書房
- 上里 一郎（1976）：乳幼児臨床心理学 福村出版
- 依田 新・波多野完治（1987）：児童心理学ハンドブック 金子書房
- “ “ （1974）： “ “
- 伊藤 隆二・田川 元康（1966）：精神薄弱児の自我に関する臨床教育心理学研究－自我の展開  
過程の設定の試み－ 臨床心理 Vol 5 67～78
- 田中 昌人・田中 杉恵（1984）：子供の発達と診断 1～5 大月書店
- 浅田 明（1987）：序説発達教育学 岩崎学術出版
- 古澤 頼雄（1987）：発達 No.30, Vol 8 発達期における自己の形成過程－エリクソンの発達段階－ ミネルヴァ書房
- 村井 潤一ほか（1988）：教育の方法9－子どもの生活と人間形成－ 岩波書店
- 上田 吉一 （1988）：人間の完成－マスロー心理学研究－ 誠信書房
- 福井 康之 （1988）：人と人とのかかわりの発達心理学 福村出版